文化財見学シリーズ31　姫路市教育委員会文化部文化課（平成５年８月31日発行）

『四 郷 町』をたずねて

四郷町は、市川の下流左岸に位置し、市川の氾濫原と八家川の南流する沖積低地からなり、中央に八重鉾山から麻生山（小富士山）・仁寿山の丘陵を有する。

明治22年の市制・町村制の実施にともない、坂元・山脇・上鈴・中鈴・本郷・見野・明田・東阿保の８大字が合併して四郷村となり、役場を坂元に置いた。四郷村は、初めは飾東郡に属していたが、明治29年からは飾磨郡となり、昭和32年に姫路市と合併した。８大字は四郷町を冠称し、姫路の大字として継承した。村名の由来は、東阿保を除いた各大字の用水源である四郷井からとったものである。

四郷地域には、５世紀後半の代表的な円墳である宮山古墳をはじめ、見野や阿保の群集墳など多くの古墳がみられ、古くより開けた土地である。神功皇后の説話も多く、元取山の東は御幡の鈴を建てられたことにより、鈴野と呼ばれ、狩場となり、「きぎすなく鈴野に君かくちすえて遊びますなりいざ待ちて見ん」（飾磨郡誌）の有名な藤原俊成の歌も残っている。

◀上空から見た四郷町

▲新羅神社

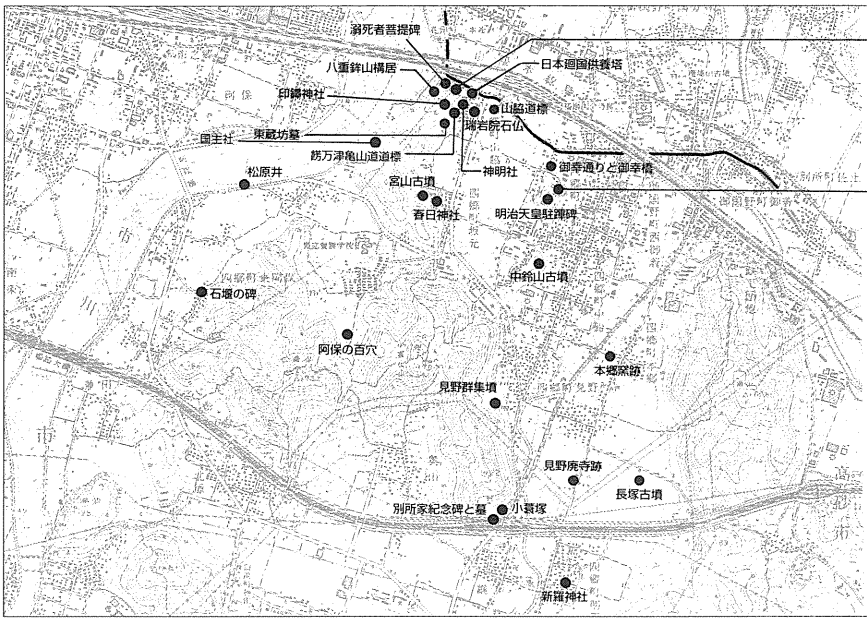
新羅神社　神功皇后は西征出発にあたり、麻生山に登り天明に及ぶ。よってこのあたりを暁田と称した。また、帰陣後、新羅の人々に葦原であったこの地を与え、明田（開墾）にさせたことから明田といい（三宅田から転じたとの説もあり、地名由来は定かではない）この新羅の人々が村の中央に社を建て皇后を祀ったことから新羅神社という。（『古跡便覧』や『巡覧図絵』では、異国（新羅）の皇子をこの地に置き、後にこの皇子を祀ったという）祭神は息長足姫命（神功皇后）、誉田別命、足仲彦命である。

別所家紀念碑と墓　天正８年（1580）豊臣秀吉の攻撃により三木城が落城。別所長治は法界寺に葬られた。しかし、家臣の杉本藤兵衛によって、嗣子小右衛門光治は加東郡長井村に逃れ、以後長井氏を名乗っていたが、明治維新後、別所氏に復した。明治37年、時の当主別所惣兵衛がこの地に紀念碑を建て、惣兵衛の子孫が東京や大阪に分かれたので、昭和14年紀念碑横に墓を建てたものである。

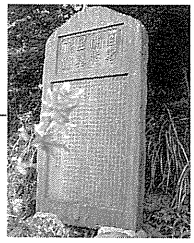
◀別所家墓

小蓑塚　麻生山（小富士山）から、東南にのびた尾根（船橋山）東麓の墓地の南入口から中に入るとすぐの所に石碑がある。正面には、松尾芭蕉が元禄２年（1689）に発刊した『猿蓑』の冒頭の発句「はつしぐれ猿も小蓑をほしげなり」が刻まれている。この石碑は、天保６年（1835）宇佐崎の俳人、石田五芳が、この辺りにつくっていた「笠舎（かさやど）」という庵の庭に芭蕉の蓑の一筋を埋め、その上に建てたもので小蓑塚という。

▲小蓑塚



日蓮宗題目塔


石叟浦先生墓碑
（藤田東湖と親交のあったという浦茂平を顕彰した碑）

見野廃寺跡　見野字二階堂に薬師堂がある。この付近は煉瓦の原料土の採取で掘り下げられたため薬師堂境内を残し水田となり、遺構はなにも残っていない。かって白鳳期から奈良・平安時代の宇瓦（う）や鐙瓦（あぶみ）などと共に、円形柱座孔をもつ塔心礎が発掘された。地表面にも布目の古瓦が多く散在し、白鳳期創建の廃寺跡であるとみられる。

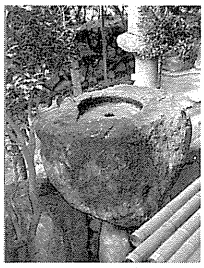
長塚古墳　見野廃寺跡東の田のなかにある。墳丘は大きく削られもとの形ははっきりとしないが、南北24ｍの前方後円墳で、６世紀後半のものと推定されている。かっては横穴式石室を２基持っていたといわれるが、その構造や規模は不明である。

見野群集墳　見野和光公園付近を中心に古墳時代後期の横穴式石室を持つ古墳が点在する。これを見野古墳群という。正確な数は報告されていないが、現在１０基の古墳が確認されている。一つの封土に２つの石室が作られているものや、石室の長さが11ｍもあり、天井石が５ｍ近くもあるため、姫路の「石の舞台」と呼ばれているものもある。

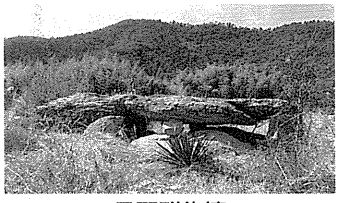
本郷窯跡　本郷の信号の東付近から、奈良時代の六葉の蓮弁をもつ鐙瓦をはじめ多くの古瓦が出土した。かっては本郷廃寺といわれていたが、その瓦は播磨国府系の瓦であるため、近年では本郷窯跡といわれるようになっている。

春日神社月代図小絵馬　拝殿から舞殿への扉の上に５枚の小絵馬があり、向かって左から２枚目が月代図小絵馬である。明治６年に奉納されたもので、子供の月代嫌いが治るように祈願したものである。

見野廃寺跡


見野廃寺心礎（文学館内）

長塚古墳


見野群集墳

月代図小絵馬

宮山古墳　5世紀後半の直径約30ｍの大型円墳で3基の竪穴式石室が存在した。第1主体は盗掘されていたが、第2主体からは、金の垂飾付耳飾や刀剣類など多数の遺物が出土した。さらに、その下から第3主体が発見され、画文帯神獣鏡や玉類などの多くの遺物が出土した。

御幸通りと御幸橋　旧山陽道、西御着公園西から元取山に向かう道幅約2ｍの南北の小道を御幸通りという。これは明治36年11月の陸軍大演習に明治天皇が行幸されたことによる。これを記念し、元取山頂上に明治天皇駐蹕（ちゅうひつ）碑がある。山陽道から南へ約30ｍ入った用水路にかかる橋を御幸橋という。

旧山陽道と山脇道標　御着駅北から西御着公園前を経て、山脇では八重鉾山の北裾を通り一本松へ抜ける道が山陽道である。山陽道は、中国路とも西国街道ともよばれた江戸時代の主要街道で、西国大名の参勤交代や旅人で賑わったが、国道2号の開通で今では忘れられようとしている。この山陽道から坂元に向かう交差点南東隅に道標がある。この道標は西向きで、地蔵座像を刻み、その下に銘を刻んでいる。

（正面）　右　やかじぞう是より一り
（左側面）　右　ヒメジ　安政六年　□□
　　左　神戸　正月吉日　国□□

山脇の日本廻国供養塔　廻国塔とは、納経塔の一種で、大乗妙典をわが国の66か所の霊場に保存するため廻国したことを銘文にした塔である。山脇の廻国塔は、明和4年(1767)上州前橋竪町の休心が姫路の石屋藤八に作らせたもので、上に砂岩の観音像を置いている。

溺死者菩提碑　寛延2年（1749）7月3日の大雨により保城の大樋が決潰し、船場川筋は大洪水に襲われた。被害は船場地区を中心に、家屋の流失161戸、溺死者及び行方不明者は408名にのぼった。この菩提碑は、宝暦5年（1755）溺死者の七回忌を機に、船場吉田町の八右衛門らが施主となり建立したものである。（寛延2年の大洪水の菩提碑は五軒邸法華寺にもある。）また、東隣りに明和8年（1771）銘の日蓮宗題目塔がある。

瑞岩院石仏　黄檗宗松光山瑞岩院は、宝永年間（1704～1711）泰州禅士が山脇八方山に一宇を建立したことに始まる。前庭の阿弥陀石仏は、台座の銘によると延享元年(1744)のもので、もとは溺死者菩提碑の西にあったものを、昭和9年に瑞岩院が現在地に移動したのを機に移されたものである。

垂飾付耳飾

御幸通りと御幸橋

旧山陽道

道標

山脇の日本廻国供養塔

溺死者菩提碑

瑞岩院石仏

印鐸神社

印鐸神社　祭神は、神功皇后・武内宿祢・大己貴命の三座である。もとは国府に置かれた国印と鍵を祀る印鑰（いんやくしや）社ではないかとも考えられている。由緒については詳らかでないが、嘉吉年間（1441～1443）のころには社があり、三野刑部が崇祀したといわれている。神前の庭には玉垣をめぐらし、天保12年（1841）銘の手水鉢が奉納されている。また、拝殿南側には大正天皇駐蹕碑がある。

神明社　祭神は天照大神と豊受大神である。境内社に手置帆負命と柿杵嶋姫命を祀る。門を入ると宝暦12年（1762）の神明造りの鳥居があり、その奥に元禄９年（1696）の石燈籠がある。拝殿や舞殿には多数の貴重な絵馬がある。特に舞殿の右奥に掲げられている俳額は、享保８年（1723）に奉納されたもので、増位山風羅堂で活躍し、播磨俳壇の中心人物であった春曙庵千山（井上千山）が撰んだ貴重なものである。かって神明社では伊勢内宮、外宮にならい20年ごとに草屋根を葺き替え、檜の鳥居２基を取り替えていたという。

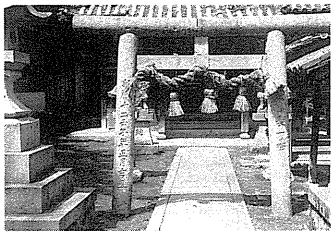
飾万津道標と東蔵坊墓　神明社前から印鐸神社参道を登ると石階段下左手に「餝万津亀山道」と書いた道標がある。道標前から細い山道があり、亀山や飾磨津に通じている。印鐸神社参道から100ｍあまり入ったところに東蔵坊の墓がある。地元では「トトボサン」と親しんでいる。東蔵坊は、『播磨鑑』によると、市之郷薬師にいた山伏で、豊臣秀吉がこの薬師に来た時、日光坊、月光坊とともに出迎えなかったため焼き討ちにあったといわれている。

阿保の百穴　麻生山と仁寿山の北側の谷に、横穴式石室をもつ古墳が多く点在する。これらをまとめて阿保群集墳とも、阿保の百塚ともいう。６世紀から７世紀にかけて造られたもので、盗掘されたり荒らされたりした上、くわしい調査がされていないことから、その全容ははっきりしない。『姫路市史』第２巻では18基が報告されているが、調査のまたれる群集墳である。

国主神社　一般に国王神社と呼ばれ、参道の石碑にも国王神社となっている。拝殿前広場には天保14年（1843）の手洗鉢があり、同広場下には、文政10年（1827）の常夜燈がある。阿保親王が、御子在原業平が播磨の国司の時、この神社に御滞在されたともいわれている。祭神は英保国主神（大国主命）である。また、拝殿正面の唐破風両側に、波の上を駆ける兎の瓦が置かれている。

松原井　阿保橋北に井堰がある。この井堰を松原井という。寛延３年（1750）の「松原村明細帳」を見ると兼田、北原、奥山、継、東山、宇佐崎、中村、松原の８か村3966石余りの用水で、井堰は70間あったという。東阿保八幡神社から村の中を北に出たところ、松原井からの用水路のそばに石堰と書いた石が置かれている。

八幡神社　東阿保光大寺の配水池下にある。拝殿の正面に八幡宮の額があり、右手に２枚の絵馬が掲げられている。その奥の絵馬は、大正14年４月、開村百周年の祝賀記念として、新田の氏子たちによって奉納されたもので、右から左奥にかけて市川を、右手から中央にかけて阿保橋と片倉製糸の遠景を描いている。近代工場のようすを描いためずらしい絵馬である。


神明社

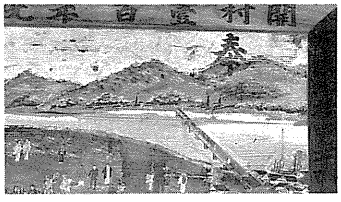
井上千山撰の俳額

飾万津道標

東蔵坊の墓

阿保の百穴

松原井の石堰


八幡神社の絵馬

■編集　大　西　文　雄
（姫路市立四郷小学校教諭）